

親鸞仏教センター通信

2003.
June

2003年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第6号

大きに^{すべ}く^{ざん}慚愧^ぎすべし

親鸞仏教センター研究員 藤 原 正 寿

親鸞仏教の特質は、悩みや苦しみを縁として自らの罪業性を慚愧するところにある。ところが、現代社会は、その縁となるべき苦悩と正面から向き合うことを許さない社会である。都合の悪いものを忌避^{きひ}し、排除することが、豊かさや幸福をもたらすという価値観が広く現代を覆^{おほ}っている。

親鸞聖人の時代から、否、人類は誕生以来、悲しみや苦悩とともに歩んできた。決して、現代人だけが苦悩しているわけではない。しかし現代は、その苦悩と向き合う時と場所が奪われている。苦悩を感じさせないあらゆる装置、例えば、日々進歩する医療技術や刺激を止めない娯楽などが、苦悩する人に先回りして準備され、苦悩を忘れさせる。苦悩するのは、その装置の存在を知らないためか、手に入れられないことに原因がある、と思わされているところに現代特有の問題がある。その存在を知らない無知と、手に入れる努力を怠っていることに人間の不幸がある、と思わされているのである。

したがって、私たちは常に、「今」を犠牲にしても、苦悩しなくてもよくなる技術や装置を追いかけることに駆り立てられる。結果、日常の生活全体が、金銭とそれを手に入れるための時間、つまり、投資とその効果という経済価値に置き換えられてしまっている。「いのち」の意味が経済価値にすり替えられるということは、経済的充足を得られないことイコール、生きていく意味の喪失となるのである。経済至上主義はまた、競争社会を正当化し、構造的な強者と弱者を作り出す。現代が、文明社会という希望と豊かさを感じさせる呼び名とは裏腹に、私たちに大きな闇を感じさせるのは、強者の驕^{おご}りと、弱者の妬^{ねた}みがぶつかり合っているからであろうか。

このような価値観への飽くなき執着に、果たして正義があるのか。他を犯してでも自らの欲求を満足しようとする行為を正当化し、明るみをもたらすと強弁する経済社会は、本当の豊かさなど生み出しはしない。忙しく走り続けることを一旦やめ、勇気を持って立ち止まり、感じている苦悩と矛盾から逃げずに向き合うことが求められている。私たちは幸せになる権利があるのだ、という強迫観念から慚愧とともに解放されるところに、「今」に満足する価値観が示されている、というのが親鸞仏教の示している方向性ではないか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 本当の柔らかさを与えるもの

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第12回から第14回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第12回では浄土の水について、第13回では浄土の大地について、第14回では浄土の音について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者・一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第10回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 言葉の山

人間は言葉の歴史をもち、貴重な言葉の蓄積があります。その言葉の山に、本当に生きた根源的な開けが欲しいと思って飛び込んでいっても、下手をすると、迷路に入ってしまったて戻る道がないというふうになりがちです。財宝の中に埋もれて、息がつけなくなる。

特に、学問というのは「象牙の塔」という言葉もあるように、突っ込んでいけばいくほど出口がなくなる。「ミイラ取りがミイラになる」という譬えがありますが、本当は、一番最先端に行けばもとへ出ねばならないのです。曾我量深先生は、「深い山に入って、一番深いところに行ったら思ったら里に出るものだ」と言っておられました。山は、いずれまた里へ出ると。だから本当は、突っ込んで一番最先端のところに行ったら時には、現実の問題に一番近いところに行っているはずなのです。

ところが、言葉の山というのはそうなるとは限らない。言葉の山に飛び込むということの根本には、何か求めているものがあり、本当は、

その求める源泉に辿り着くか、もしくは戻って来なければいけないのですが、戻って来なくなるということがあるのです。

私が尋ね入った親鸞聖人の言葉の山も、場合によっては、汗牛充棟して無味乾燥な言葉の山ともなりかねない。ですから、生きた現代の課題と触れながら言葉というものを洗わないと、言葉を洗うということは、古い言葉が新しい言葉と擦れ合って、古い言葉が換骨奪胎すると言いますか、そういうことなしに、古い言葉が古い言葉として伝えているひとつの意味空間の中にただ埋没してしまうと、現実の問題と全く無関係な虚偽の空間になりかねないのです。そうすると、現実の人間、生きている苦悩の実存と触れることができなくなる。これは、私どもの大変陥りやすい病です。

幸いにして私は、念々に、切れば血が出るような思索をしておられる先生に出会うことができ、長い間、その先生から教をいただいてまいりましたから、ミイラの山から出ることができたと言いますか、言葉の山に突っ込んでいくことはなかったわけですが、しかしまだ、何時突っ込んでいくかわかりません。

そういう意味で、「そんなところで眠っている暇などないぞ」という課題が、生きているこの大地を揺るがしているような気がしています。ただ単に、現実の困難な課題に突っ込んでいくのではなく、古い言葉が語る、言葉の深い深い源泉というものを依り処にしながら、古い言葉が語ろうとする根源的な開けの世界を、現代の困難な思想状況の中に開いていきたいと、私はそんなふうに自分の願いを位置づけています。

■ 柔らかな心

『浄土論』の展開の中で、「^{そく}触功德」という言葉で教えられている問題があります。そこでは、浄土の「草」ということを、「^{ほうしやうくどく}宝性功德の草、^{にやうなん}柔軟にして左右に^{めぐ}旋れり、^ふ触るもの勝^{しやう}楽を生ずること、^{かせんりん}迦旃隣陀に過ぎたり」と言っています。浄土の草は、とても柔らかくて、「迦旃隣陀」という、この世のきわめて柔らかい草よりも、もっと柔らかい。そういう語り方です。これもひとつのイメージ、象徴ですから、文字どおり、浄土に柔らかい草が生えている、そんなことを言っているわけではありません。本願の超越性に触れるということは、人間に本当の柔らかさを与えるのだという、そういうことの象徴でしょう。本当の柔らかさとは何かというと、「^{にやうなんしん}柔軟心」ということが言われています。柔軟心とは、^{ふに}不二の心です。

われわれは、常にふたつの心です。自分がいて他人がいる。自分がいて物がある。つまり、自他が割れ、自分というものが、常に他を外に見て一体感を失っている。男と女も違うし、動物と人間も違うと言う。では、みんな違うけれどもひとつだということを、一体、どこで感じることができるのかということです。

ここでは、ただ生きている現象でみんな同じだと言うのではなく、浄土という大地においてひとつだと言うのです。つまり、みんな違うのだけれど、みんな違いながら違っていることの根源に平等性を感じると。人種が違おうと、生きている国が違おうと、あるいはイデオロギーや価値観が違おうと、根源的には平等だという^{まなこ}眼をもつのが仏教徒の姿勢でしょう。

人間は、しょせん頑固です。一人ひとり違う生命を自分で生きているのですから、どうしても相手（他の人）にはなれない。どんなに親しい友であっても、ひとつにはなれない。実は、「違いながらでいいのだ」という関係でなければ、本当は親しい友と一緒にはおれないはずです。同じになろうとしたら必ず喧嘩になる。「お前とは違う。違うけど仲がいい」。そういうこ



「親鸞思想の解明」(有楽町の「東京国際フォーラム」で)

とはあり得る。そういう意味で、柔軟心ということは、非常に大事ではないかと思うのです。

仏陀は、教えるときに「相手と同じ心になれ」と教えられた。では、同じ心になれと教えられてなれるかということ、人間はなれません。けれども、なれないということにおいて自分を自覚する。そして、より大きな、もっと広大な大悲というものが仰がれてくることにおいて、違うままに許される。そこに、何か柔らかさというものが与えられる。そういう世界を開いてくる。こういう意味の象徴が、浄土なのです。

今の人たちは、みんな自分の場所を作ろうと争っている。自分の場所、自分の場所と言っておつかり合っている。だから、孤独になるのです。近代文明の果ては、みんな孤独老人しかないわけでしょう。それを本当に破るものは何か。難しい問題ですけど、浄土という問題が、こういう形で私たちに教えられているのです。

(文責：センター)

※本講座(第5回～8回)の詳細は、『現代と親鸞』第3号に掲載しています。お申し込みはセンターまで。

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2003年6月13日(金)午後6時30分～9時

7月24日(木) 同上

8月21日(木) 同上

場所：有楽町・東京国際フォーラム G405

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

りがたし。

浄土じょうどの慈悲じひというは、念仏③し

て、いそぎぶつ仏になりて、大慈大悲

心をもつて、おもうがごとく衆生

を利益りやくするをいうべきなり。

今生こんじょうに、いかに、いとおし不

便びんとおもうとも、存知ぞんじのごとくた

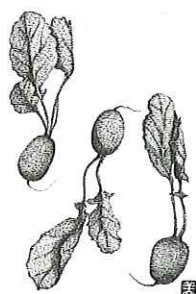
すけがたければ、この慈悲じひ始終な

し。しかれば、念仏ぶつもうすのみぞ、

すえとおりにたる大慈悲心にてそう

ろうべきと云々

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)



語 註

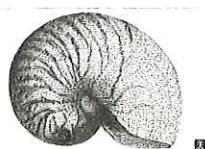
今の人生において、どれほどいとおしく、またかわいそうだと思つてみても、人間の思いどおりにはたすけられないのだから、この愛は徹底しないのである。そうであるから、如来の本願にすべてをまかせることだけが、徹底した大いなる愛なのである。

①【慈悲】衆生の苦しみを抜き、衆生に樂を与えようというところ。相手の苦しみや悲しみに同感して、そこから救おうとするところだから、ここではあえて「愛」と表現した。

②【聖道・浄土】道綽どうしゃく(五六二―六四五)は、仏教を聖道門・浄土門と分けられた。聖道門は自力・難行道で、この世で悟りを開く道であり、浄土門は他力・易行道といわれ、浄土で仏になる道である。『歎異抄』の文脈では、慈悲の質的違いとその転換としてとらえられている。

③【念仏して、いそぎ仏になりて】本願他力のはたらきで、愚かな凡夫がそのまま仏に成ること。「いそぎ」とは時間概念ではない。絶対矛盾が全肯定されること。

(訳・語註…センター)



『anjali』第5号および

『現代と親鸞』第3号を刊行

このたび、情報誌『anjali』第5号(写真上)、並びに研究誌『現代と親鸞』第3号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第5号では、哲学者の鷲田清一氏、ジャーナリストの江川紹子氏、高エネルギー加速器研究機構長の戸塚洋二氏、臨床教育研究所「虹」所長の尾木直樹氏など、十名の各専門分野の方々に、現代社会・現代人の諸課題について、ご執筆いただいています。

一方の研究誌『現代と親鸞』第3号では、研究論文「現代における真宗の人間像」(藤原正寿研究員)、「現代と親鸞の研究会」から精神科医の高橋紳吾氏、医師の山藤純子氏の問題提起と質疑、また、本紙2・3頁で紹介の「親鸞思想の解明」(本多弘之所長の問題提起、第5回・第8回の4講座分)を掲載しています。

なお、『現代と親鸞』購読のお申し込みは、センターまで。



『聖典』の試訳（現代語化）

「慈悲」を「愛」と翻訳することについては、研究会でもずいぶん議論がなされた。愛は、ラブ・アガペー・エロースの翻訳語でもあり、儒教思想にもある。また、仏教では「我愛・貪愛」と否定的にも表現されるが、「信愛・喜愛」と肯定的な表現もある。その意味で、「愛」は、さまざまな意味の世界を連想させる。

意味が多重であるということは、概念的には「曖昧」と評価される。しかし、「概念は、明確であっても生命力に欠ける。イメージは、曖昧であるが生命力をもつ」と精神分析家のユングは言っている。「曖昧」であることが、かえって生命力をもつのである。そこで、ここでは生命力を引き起こすイメージ言語としての「愛」を採用することとなった。（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第四条〉

原文

①じひ ②しようどう
慈悲に聖道・浄土のかわりめ

あり。聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてあ

現代語訳

愛には、人間の思いを中心とした愛と人間の思いを超えた愛の違いがある。人間の思いを中心とした愛というのは、いのちあるものに同感し同情し、いとおしみ育てることである。しかし、思いどおりに愛を実現し、相手を満たすことは大変難しい。

人間の思いを超えた愛というのは、「ひとを愛するこころの限界を自覚して、いち早く如来の前にすべてを投げ出すことによって、人間の思いを超えた如来の愛が自由自在に、ひとを救うはたらきをする」というべきである。

親鸞仏教センターの動き

(2003・3・5)

■2003年

- 3・1 『親鸞仏教センター通信』第5号を発行。
 - 3・3 親鸞仏教センターホームページ製作会議。以降、継続して製作会議を開催。
 - 3・13 第14回英訳「教行信証」研究会。以降、5回の研究会を開催。
 - 3・14 親鸞聖人ご命日のつどい
 - 第57回研究会議（研究・交流・出版の協議と企画。以降、8回の研究会議を開催。第9回清沢満之研究会。以降、2回の研究会を開催。
 - 3・15 熊谷内局発足（熊谷宗惠宗務総長・櫻井智浩研究員に博士（文学）が学位授与される。論題「チベット注釈書による『入菩提行論』般若章の研究」。
 - 3・25 第21回『聖典』の試訳『歎異抄』研究会。以降、3回の研究会を開催。
 - 4・11 第15回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
 - 4・22 第10回清沢満之研究会「道徳心と宗教的信念―清沢における哲学と宗教―」大谷大学名誉教授・寺川俊昭氏（文京区・東京ガーデンパレス）
 - 5・9 第1回「親鸞仏教センターのつどい」（センター並びに文京区・学生会分館）
 - 5・16 第16回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
 - 5・19 現代と親鸞の研究会④「カルトの予防と宗教教育」東北学院大学名誉教授・浅見定雄氏（文京区・東京ガーデンパレス）
 - 6・1 第1回親鸞思想の解明懇談会（センター）
- 親鸞仏教センターのホームページを開設。
『聖典』第5号、「現代と親鸞」第3号、
『親鸞仏教センター通信』第6号を発行。

現代と親鸞の研究会・第 6 回

われわれは、いかなる時代を
生きているのか

作家 辺 見 庸



辺見 庸氏

昨年（2002年）11月26日、川越プリンスホテル（埼玉県川越市）において、作家の辺見庸氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

超帝国主義国家・アメリカの価値観のみに蹂躪される国際社会、そして、戦後民主主義が有名無実化してしまった日本の現状も危惧されている。この危機的状況に一人ひとりがどう向き合っていくべきかについて、辺見氏に語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ 国家・組織の貌

— 内側からの眼、外側からの眼

まずお話したいことは、1999年からの日本の変化ということがあります。国家や組織が持つ、恐ろしさや醜さというものは、内側からはなかなかわからない。それを指摘するのは外側の^{まなこ}眼^めというか、眼の位置の自覚的な移動、移し換えのようなものを絶えずしておかないといけないのではないかと思います。

ですから、日本という国が、平和国家であるという自意識を内側に持っていても、外側にはそうは見えない、見えていないという可能性が大にあるのではないかと思います。そういう意味で、この4年間で、われわれが気づかないうちに、日本は相当な「悪相」になっているのではないかと。つまり、危機感のなさ、変化を感じし感知することへの鈍さということにおいて、1930年代と非常に似ているのではないかと

ということです。この4年間、「周辺事態法」「盗聴法」「国旗・国歌法」、さらに「改定住民基本台帳法」も通っています。また、「国会法」を改正して、「憲法調査会設置法」という法律もでき、国会議員の過半数が憲法改正定案を考えているということがはっきりしてきました。これに伴って、戦後の日本ではかつてなかったことですが、「有事法制」というものを何はばからず言える雰囲気、1999年から出てきています。

さらに、それに勢いをつけてしまったのが、2001年9月11日のアメリカの同時多発テロだったと思います。今年（2002年）に入って、いわば戦争への大きな流れと言ってもいいと思うのですが、4月16日に有事法案（いわゆる三法案、「武力攻撃事態法案」「自衛隊法改正案」「安全保障会議設置法改正案」）が、戦後初めて閣議決定されるという事態になりました。事実上の、いわば「無憲法状態」がここでできてしまったと言っても過言ではないと思っています。これらをまとめて考えると、日本という、この国の外面も内面も、実は、4年間で大きな変化を遂げている、ということを認めないわけにはいかないと思います。そういう動きに、一人の人間として、どう対処することがいいのか、ということをおぼえてはいます。

■ 〈言語圏〉の面から考える — 意味の戦争

組織や国家、あるいは会社や家庭の中には、それぞれ独自の言語圏というものが、自ずとあると思います。僕は最近、そういう、いわば「言語圏」という面からものを考えています。

冷戦時代には、一方のプロパガンダには必ず

カウンタープロパガンダという、いわば対抗言語というものがあって、言語圏の闘いが絶えず行われていたと思うのです。対抗的な価値、対抗的な言語を持ち得ないということが、冷戦後の閉塞状況を作っているわけです。

今度の9・11以降、アフガニスタンの現状その他を見ると、カウンタープロパガンダを完全に失って、事実上、米国の帝國的言語の時代に入っているのではないかと考えています。それ以外の概念を、「ブッシュ・ドクトリン」というものは認めていません。帝國的言語というのは、絶対言語と言い換えてもいいと思います。多様な価値観を認めるというドクトリンでは全くなくなっているのです。

結論から言うと、僕自身、もうすでに「意味の戦争」に参戦しています。恐らく皆さんもまた、意識しようがしまいが、意味の戦争に、実はもう巻き込まれているはずですよ。僕という小さな戦線の中で、自分が考える世界の意味、人間の意味、あるいは非人間性ということは一体何なのか、あるいは宗教の意味というものを、自分で定義づけていかなければなりません。それと異なるものを、特に、抑圧して来る絶対言語に対しては、やはり四つ相撲を取らざるを得ない状況に来ていると考えています。

■ 持ち場からの表現を

今の状況は、危険水域を遙かに超えて、臨界点に達しつつあると考えています。臨界点に達しつつあるというのは、北朝鮮問題もありますが、やはり、イラクに対する攻撃が秒読みになっているからだと思います。このまま行くと、世界の意味も、人間そのものの意味も、あるいは宗教の意味も、そういうものの一切を、超帝国主義と言ってもいいアメリカが統べ、支配してしまいます。そして、その流れに抵抗すると、今度はテロリストのように言われるような世の中です。これは、かつての1930年代から40年代にかけての、ナチスドイツの肥大化以上の危険性があると思います。

僕は、戦後民主主義というものが、「主義」ではなくて、むしろ集合的な「気分」、あるいは「知のお飾り」に過ぎなかったのではないかと、という思いを非常に強く持っています。今の日本の現状である「鵠のような全体主義」をそのようにしからしめているのも、実は、こういう集合的な「気分」が根っこにあるからではないか、と僕はずっと申し上げているわけです。

その背景には、やはり天皇の戦争責任、あるいは戦後日本の再生における天皇の位置というものに、われわれのいい加減な始末の付け方があって、そのことが、われわれが主体を語れない、歴史というものを根源から語ることができない立場にしてしまった。そういうわれわれの位置を、まずその土台のところから作ってしまったのではないかと。僕としては、意味の戦争というものの中で、自分自身がもう交戦状態にいると思っています。その中で、自分の言葉と思考を駆使しながら、今後とも闘い続ける以外にはないと考えています。（文責：センター）

辺 見 庸（へんみ よう） 作家

1944年、宮城県生まれ。早稲田大学文学部卒業。70年、共同通信社入社。北京特派員、ハノイ支局長、編集委員などを経て96年退社。78年、中国報道で日本新聞協会賞、91年『自動起床装置』（文春文庫）で芥川賞、94年『もの食う人びと』（角川文庫）で講談社ノンフィクション賞を受賞される。他に、『ゆで卵』『屈せざる者たち』『眼の探索』『独航記』『単独発言』（以上、角川文庫）、『新・私たちはどのような時代に生きているのか』（岩波書店）、『反定義—新たな想像力へ』（朝日新聞社）、『永遠の不服従のために』（毎日新聞社）などがある。本年4月から早稲田大学客員教授。また、『アンジャリ』（親鸞仏教センター）第4号に「人間はどこまで非人間的になれるのか」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（川越市の「川越プリンスホテル」で）

■ 英訳『教行信証』研究会を発足

この研究会では、鈴木大拙師の英訳『教行信証』を底本に、『教行信証』の現代的表現の試みを、2002年7月から月2回のペースで進めています。以下、研究会について報告します。

① 鈴木大拙師『教行信証』研究のねらい

本研究会のねらいは、真宗と鈴木大拙（1870～1966）の禪を中心とした大乘仏教理解、さらに欧米圏のキリスト教という三つの思想的立場を乗り越え、『教行信証』を現代の言葉で理解することにある。

『教行信証』前四巻の英訳（1961年草稿完成、1973年出版）は、欧米圏への親鸞思想の発信とともに、現代日本語への再訳の展望をもっており、漢語文化よりも西洋

的な思考に慣れた現代人には、理解の上で身近なものと言える。しかし、その訳文には、禅者・鈴木大拙の『教行信証』理解が反映されており、単に訳文を追うだけではなく、大拙の仏教思想、そしてそれを英語で語る中で培った知見を、われわれ自身も学んでいく必要がある。

親鸞聖人の思想を大拙師のように生き生きとした言葉として理解し、伝えていく取り組みは、センターの願いの具体化にも大きく寄与するものと思われる。

② 研究会の概観

現在、「総序」を一旦読了し、相当箇所（グロッサリー（語彙集））を和訳しつつ、日本語訳の再検討を行っている。その中で、例えば、次のような点が指摘された。

(1) 大拙師の「本願」理解について

師の仏教理解の特色は、訳語にも端的に表れている。例えば、一般的には、Original Vow（本来的な誓い）と英訳される「本願（弘誓）」に、Prayer（祈り）という訳語をあてている。初期の論文では、Original Vow と訳されており、この訳語は、師の思索の一到達点と言える。グロッサリーに含まれる自身のノートには、「〔本願とは〕人間の言葉で表された阿弥陀そのもの」

(Amida himself expressed in human terms) とあり、師独特の理解の一端をうかがうことができる。

(2) 大拙師の表現方法について

表現方法にも着目すべき点がある。仏教思想の伝達にあたって、欧米では一般的な思想表現が大胆に採用されている。その場合、共通点が多い概念を相違部分に注意を促しながら借用する一方、仏教とは相容れないような概念を取り上げて、両者の相違を際立たせるという手法も認められる。いずれも、仏教のみならず、実際に西洋に身を置き、そこでの生きた思想を理解することなくして果たされないものである。現代社会に、仏教、親鸞聖人の思想を発信していくとき、伝える相手のことを知る重要性を、ここに見ることができる。

③ 坂東性純先生をお迎えして

ある人物の思想を探究するとき、その人物像に触れていくことも重要である。本年、2月4日には、浅草ビューホテル（台東区）において、大拙師に師事された元上野学園大学教授の坂東性純先生（写真）をお迎えし、「鈴木大拙師の英訳本に学ぶ」と題してご講演をいただいた。坂東先生から、大拙師との関わり、英訳『教行信証』

執筆の経緯とその意義、ご自身も関わられたグロッサリーの編纂など、多岐にわたって興味深いお話をうかがうことができた。



大拙師の真面目は、仏教を世界的思想として紹介し、自身の生きざまとしても体現されたことにあります。外国語で表現する場合、内から外へという方向性に目が向きがちですが、「本願」の訳語にも見てとれるように、実は、仏教の新たな思想表現の模索であり、仏教そのものの理解の深化にほかなりません。「外は広い、内は深い」という大拙師の言葉に促されながら、これからも研鑽を重ねていきたいと考えています。（櫻井智浩）

— ホームページの開設とメールアドレスの変更（お知らせ） —

インターネットを通じて情報発信を行っています。

また、Eメールアドレスが、6月から下記に変更となります。

(旧) tomo-k35@k6.dion.ne.jp ⇒ (新) shinran-bc@tomo-net.or.jp

親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 親鸞からあなたへのメッセージ —

あ と が き

今や、日本のインターネット利用者は、2001年末で5593万人、世帯普及率60.5%。2005年には8720万人に達すると予想されている。世界でも、2002年2月で5億4420万人と、ここ数年、爆発的な増加を続けている（総務省2002年度「情報通信白書」）。時と所と人を選ばず、情報量の多さと料金の安さ、さらに検索の速さと簡単さが現代人のニーズと合致し、利用者層も老若男女を問わず、拡大の一途である。これまでのような、顔と顔の見える人間関係に大きな変化をもたらしたことは、疑う余地のない事実である。この全く新しい媒体の出現によって、これまで想像も、経験もしたことのない、出会うはずのない人と人とを結びつける機能が始まったのである。このようなインターネットの世界に親鸞仏教センターも参入し、このたびホームページを開

設した。その意味はどこにあるのか▼顔と顔の见えない関係のインターネットでは、時代が変わっても少しも変わることはない「生老病死」という人間苦の本質を明らかにすることはできないという声も聞こえる。しかし、「今」をどう生きるのかという命題は、老若男女を問わず、共通に直面している課題であることだけは間違いない。現代人の多くは、生活を根底から支える精神的依り処との「出会い」を願い求めている。だからこそ、新しい媒体を遠ざけることなく、コミュニケーションのできる「場」を開くことが、まずは大切でないか。しかも、人によって選択性を幅広く持てるものでなければ、せっかくのチャンスも失っていくことになる。ホームページの開設が一つのきっかけとなって、新たな対話と交流の生まれることを願っている。（長谷岡）